

痛みの先に見えたもの

喜多方市立塩川中学校 三年 佐藤 榎音

「いける！」

校内陸上大会の走高跳。そう確信して踏み切った、次の瞬間でした。着地した右足に走った激痛。何が起こったのか分からず、ただ痛みに耐えるしかありませんでした。診断は「全治四ヶ月」。歩けなくなるわけではない。けれど、自分の努力で掴み取った部活動の県大会は、その瞬間に消えてしまいました。診察室を出て、母の顔を見た途端、堰を切ったように涙がこぼれました。

一年前のあの日、私が失ったのは県大会だけではありませんでした。「自分のことは自分でできる」という、疑いもしなかった日常そのものでした。入院生活は、痛みとリハビリとの闘いでした。歩くことさえできず、着替えやトイレも一人ではできない。昨日まで意識できていたことが、すべて「困難」に変わりました。そして、その不自由さの中で初めて気づかされたのです。私は決して一人で生きていたわけではないのだ、ということに。

家族は仕事忙しい中でも毎日顔を出してくれました。学校へ送り迎えし、食事を用意をしてもらう。そんな毎日を、私はあたりまえだと思い、そのありがたさに気づかずにごしてきました。また、学校が終わる時間に届く、友達や先輩、後輩からのメッセージ。「大丈夫？」というその一言が、孤独な夜にどれほどうれしかったか。私は、人を頼るところはどこか恥ずかしいことだと思っていました。けれど、人は困った時にこそ支え合って生きていくのだと、身をもって知りました。

この経験から、私の世界の見え方は変わりました。私には手を差し伸べてくれる人がいた。けれど、世の中には、その手を伸ばしたくても誰にも届かない子どもたちが大勢います。例えば、いじめに苦しむ人たち。年間のいじめ認知件数は約七十三万件。一日にすると約二〇〇〇件ものSOSがどこかで上がっています。もしあの時、私に「大丈夫？」と声をかけてくれる友達がいなかったら、私の不安はどれほど深かったでしょうか。私は、誰かを傷つける言葉ではなく、誰かを支える言葉を選べる人になりたいと強く思います。

また、ヤングケアラーとして、家族の介護や世話を日常的に担う同世代もいます。中学生の十七人に一人が、勉強や部活動の時間を削り、誰かを支え続けています。私が家族に支えられた四ヶ月、逆に、自分の時間を捧げて家族を支え続けている。その現実、胸が締め付けられました。

さらに、虐待によって家が安心できる場所ではない人もいます。児童相談所の相談対応件数は年間二十三万件を超え、過去最高水準です。だからこそ、家族だけでなく、友達、先生、地域の人、安心して「助けて」と言える誰かがいる社会になってほしいと願っています。

そのために、私にできることはなんでしょう。私には、特別なことではできません。「大丈夫？」と声をかける。困っている友達の荷物を持つ。一人でいる人を気にかけて、小さなサインを見逃さない。私を支えてくれた友達も、きっと特別なことをしたつもりはなかつ

たでしょう。けれど、その何気ない優しさが、一人の人間の絶望を希望に変える力になるのです。

私は今回の怪我で、大切なものを失ったのではなく、一生忘れることのない「視点」を学びました。支えてもらった分、今度は私が、誰かの背中をそっと支えられる人になりたい。一人ひとりの小さな思いやりが、いじめや孤立を減らし、誰もが安心して弱音を吐ける社会につながっていくと信じています。この夏、私は県大会に出場することができました。支えてくれるすべての人への感謝を胸に、私はこれからも歩み続けます。自分のため、そして、誰かのために。